
ACE COMBAT 天空の戦神

藤宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A C E C O M B A T 天空の戦神

【Nコード】

N 4 1 8 3 P

【作者名】

藤宮

【あらすじ】

2030年、地球外生命体とのファースト・コンタクトは世界に驚愕と歓喜をもたらした。

しかし・・・それは新たな戦乱をもたらす序章であり、ユージア大陸に再び争乱の足音が近づいていた。

だが・・・いつの時代にも争乱を収めてきたエース達がいた。

そして今、新たなエース達が天空に舞う！

『登場人物』

風間麗慈

年齢 17歳

身長 170? 体重 62?

階級 空軍少尉

所属 アラブディア空軍 第1航空師団第9航空小隊『ホルス』

性格・主義 くだけた言動だが冷静沈着で切れ者。機体・パイロットとも生還を信条とする

使用機体 NX-01（後にXF/A-21ホルス）

嗜好品・趣味 演歌・歌舞伎観賞・たこわさ

アラブディア空軍に所属する傭兵。TACネームは『ゼロ』。

4年前のゼネラル・ISAFの戦争に参加、トミーと共に多大な戦果を上げた功績を持つ。

現在はアラブディア空軍の専属傭兵として国境警備を行っている。

自身の見た目（髪と瞳の色）に少なからずコンプレックスを抱いているらしく、サングラスをかけ帽子をかぶる事が多い。

家族はおらず、トミーや基地の人達だけが家族同然に接している。

高い潜在能力を持ち、13歳の時から戦闘機に乗っている為、史上最年少のエースと呼ばれている。

トミー・ヘンドリック

年齢 28歳

身長 185? 体重 88?

階級 空軍少尉

所属 アラブディア空軍 第1航空師団第9航空小隊『ホルス』

性格・主義 おしゃべりでロック好きだが仲間思い。燃え尽きて死ぬがロックは死なないという信念を持つ

使用機体 MiG-1.44

嗜好品・趣味 ロック音楽・ロックレコード集め
アラブディア空軍に所属する傭兵で麗慈の相棒。TACネームは『
チヨッパ』。
ロックを大音量で音楽を鳴らし、自身もノリノリで歌う。
また、かなりのおしゃべりでもあるため周りからは「やかましい」
と言われている。
4年前の戦争で麗慈と出会い、以降は彼の二番機として活躍してい
る。
アルヴィン・H・ダヴェンポート中佐の甥っ子でもあるためか、顔
つきが似ている。
クラウザー中佐には毎回怒られており、ある意味基地の名物となっ
ている。

レイナ

年齢 20歳

身長 158? 体重 秘密

階級 一等航空兵

所属 『ヴァルキュリア隊』

性格・主義 優しく物腰低いが芯は強い

使用機体 『アゲハ』

嗜好品・趣味 ケーキ・絵本集め

惑星セリアンスロウから来た異星人の女性。TACは『アゲハ』。

容姿は人間と同じだが、人間の耳が無く白狐の耳と尻尾を持つ。

髪の色が特徴的で、薄い青色だが途中から白っぽい水色変わってい
る(グラデーションヘア)。

女性だけで構成された戦闘機部隊『ヴァルキュリア』の新米パイロ
ット。

スタイルが良い(トミー曰くダイナマイト)上に優しいためか整備
班たちにモテる。

実戦経験が皆無な為か実戦で焦る事が多く、本人も気にしている。

向上心はあるが空回りする事が多く、落ち込む事が多い。
ロマンチックな出会いや白馬に乗った王子が迎えに来ると夢見がち
な面がある。

マヤ

年齢 24歳

身長 168? 体重 聞こうとしたら殴られた

階級 大尉

所属 『ヴァルキュリア隊』

性格・主義 男勝りで気がやや短い

使用機体 『クラーズナヤ』

嗜好品・趣味 酒

レイナと同じく惑星セリアンスロウから来た女性。TACネームは
『バイオレット』。

レイナの姉だが、スリーサイズと耳と尻尾以外は似ていない（姉妹
かどうかすら疑われたほど）。

髪の色はレイナとは異なり赤色で途中からダークレッドに変わって
いる。

服装もかなり派手で、露出狂ではないかと言われるほど露出度が高
い服を好む。

妹であるレイナにちょっかいを出す輩には容赦が無いため、恐れら
れている。

口調も男同然（一人称が俺）なので余計モテない原因となっている。

風嶺剣十郎

年齢 18歳

身長 172? 体重 不明

階級 空軍少尉

所属 アラブディア空軍 第1航空師団第8航空小隊『セト』

性格・主義 常に冷静でクール。何事もビジネスと割り切る

使用機体 SU-35

嗜好品・趣味 なし

アラブディア空軍に所属するセト隊の隊長。TACネームは「サンドストーム（砂嵐）」。

過去の内戦で家族と自身の左目を失い、現在はデルタ型の眼帯をしている。

麗慈の友人でありライバル関係にある。

別の基地におり、輸送部隊の護衛を主な任務とする。

常にクールな態度を崩さないためか無愛想で辛口な言葉を吐いたりする。

しかし貧しい者を見ると手を貸したりする一面もある。

漆黒のSU-35を乗りこなし、冷酷とも言える無慈悲な戦い方のため敵対者からは「砂漠の黒竜」と恐れられている。

サイファー・レオハルト・ヴァンダム

年齢 19歳

身長 174? 体重 61?

階級 空軍少尉

所属 アラブディア空軍 第1航空師団第8航空小队「セト」

性格・主義 礼儀正しく真面目。ただし眼鏡の話になるとうるさい

使用機体 JAS-39C

嗜好品・趣味 眼鏡集め・AI製作・VI作り

アラブディア空軍に所属するセト隊の二番機。TACネームは「アーキテクト」。

麗慈と剣十郎の友人であり、二人の支援役を行う事が多い。

二人には僅かに及ばないがエース級の腕はある。

多くのコックピットパーツを趣味で作り、高い評価を得ている。

眼鏡に対して異常な執着心（本人曰く愛着心）を持っているため、周りには引かれている。

なお、アーキテクトは彼のニックネームでもある。

ブルーローズ

年齢 25歳

身長 167? 体重 機密事項

階級 少佐

所属 『ヴァルキュリア隊』

性格・主義 厳しくも優しい。人をよくからかう

使用機体 『クイーン』

嗜好品・趣味 酒・チェス・いたずら

ヴァルキュリア隊の隊長。TACネームは『メルツエル』。

容姿はレイナ達と同じく動物の耳と尻尾を持つが、彼女は白虎の耳と尻尾、青い鳥の翼を持つハーフ。

人にいたずらを仕掛け、反応を楽しむという趣味を持つ為、一部の
人からは快く思われていない。

調子に乗りすぎて剣十郎に機体の左翼を破壊された事もあり、現在
はいたずらを少し自重している。

しかしパイロットとしての実力は本物で、模擬戦で麗慈と剣十郎を
同時に相手に出来る程の技量の持ち主。

ステインガーと付き合っていたが、ある事がきっかけで別れた。

ドロレス

年齢 24歳

身長 166? 体重 謎

階級 大尉

所属 『ヴァルキュリア隊』

性格・主義 常に落ち着いている。

使用機体 『ホーク』

嗜好品・趣味 クレー射撃・シューティングゲーム

ヴァルキュリア隊の二番機。TACネームは『アウル（梟の英語読み）』。

セリアンスロウ人らしく人間の容姿に狼の耳と尻尾がある。常に落ち着いた態度で接し、ブルーローズのツッコミ役が出来る数少ない人物。

機体には誘導兵器の類や装置を外し、無誘導兵器を愛用する変わった人。

しかし今まで一度も外した事が無く、ロケットランチャーで動き回る敵機を落とした事もある。

ジエームズ・クラウザー

ムバールク基地の司令官で階級は中佐。年齢は58歳。

数十年前に『ウォードック隊』をサポートした空中管制指揮官『サnderヘッド』その人である。

チヨッパの死に酷く後悔して、ウォードック隊のメンバーが偽装の死を遂げた後に退役。

四年前にアラブディア空軍の中佐として迎えられ、ダヴェンポート中佐の甥であるトミーと出会い、再び管制指揮官として前線に立つ。トミーを叱れる唯一の人物であり、『雷オヤジ』と呼ばれている。

ロック・サンダーハート

ムバールク基地に所属する整備班長で階級は特務中尉。45歳。

麗慈とトミーとは戦争の頃からの知り合いで、よく一緒にいる。

ポーカやブラックジャックなどのカードゲームが好きで、勝てば好きなものを好きなだけ注文させると豪語している。

しかし誰も彼に勝てず、奢らされる破目に遭う。

“ネクストタイプ”の電装品は若い部下に任せ、自分はエンジンなどの調整を行っている。

過去にサンド島でブレイズたちの機体整備を行っていた。

『熱砂の飛行隊』

雲一つ無い砂漠の空を、二機の戦闘機が飛んでいた。

一機は黒一色に炎の絵を描いたMiG-144、もう一機は赤と青、黒と白の四色のF-15S/MTDの容姿をした改造機だった。二機の尾翼には、太陽を横に飛ぶ黄金の鳥のエンブレムが描かれていた。

こちらホルス1、現在のところ異常は無い

「了解ホルス1。ホルス2、ホルス2応答せよ」

管制官がF-15の後ろにいるMiG-144に通信を入れると同時に、大音量のロックミュージックが、管制室に響き渡る。

「ホルス2！トミー少尉！！音楽を止める！！」

大声で言っても、聞こえていないのか、一向に止まる気配が無い。

「トミー・ヘンドリック少尉！！」

管制官が怒鳴ると、ようやく音楽が止まる。

「なんですか？呼びました？」

MiG-144のパイロット、トミー・ヘンドリックが陽気な返答をする。

「何度言えば分かるんだ！哨戒任務中に音楽を聴くなとあれほど」

「はいはい、分かっていますよ」

トミーが一方的に通信を切ると、管制官は溜息を吐く。

「風間少尉、帰還した後にトミー少尉を部屋に呼んでくれ」

ホルス1了解

通信を終えたF-15のパイロット、風間麗慈は二番機のトミーに通信を入れる。

だが先ほどと同じく、大音量のロックが耳に入った。

「トミー、哨戒任務終了だ」

だが聞こえるはずも無いため、麗慈はトミーの機体の上に自分の機

体を移動させ、上下逆さにする。

そして発光信号を行い、帰還指示を出した。

二人が所属するのは、ユージア大陸の砂漠地帯に首都を置く新国家、アラブディア共和国の空軍傭兵部隊で、国境付近の警備を任されている。

しばらく飛んでいると、最前線基地であるムバーラク基地が視界に入る。

ホルス隊、着陸を許可する。着陸チェックを実施し、着陸せよランディング・ギアを下ろし、二機が滑走路に減速しつつ着陸する。着陸させた機体を格納庫に入れ、コックピットから降りると、サングラスを掛けた年配の男、管制室でトミーを怒鳴った人物であるジームズ・クラウザーが待ち構えていた。

「トミー少尉、お前には話がある」

口は笑みを浮かべているが、こめかみが引きつっているのを見て、トミーは麗慈にアイコンタクトで助けを求める。

しかし麗慈は「自業自得」と言い残し、その場を後にすると一分と経たない内に、大きな怒鳴り声が格納庫に響き渡った。

冷房の効いた休憩室に、着替えを終えた麗慈が入ってくる。

機体に乗っている時は、ヘルメットとバイザーで分からないが、彼の髪は右が白で左が黒、瞳も赤と青のオッドアイと特徴的な外見だった。

「坊主、機体の機嫌は良かったか？」

「サンダー整備長」

声のした方を見ると、整備班長のロック・サンダーハートがコーラの缶を持って立っている。

「整備班には感謝してるよ。あのじゃじゃ馬、NX-01の整備を行ってくれているから飛べる。電装品も現存の機体とは違うからこずるだろ」

「電装部分は若いもん任せとる。ワシが出来るのは機体の整備だ

けだ」

サンダーハートはそう言いながら、麗慈にコーラを渡した。

「Nプロジェクトの結晶・・・だからな」

Nプロジェクトとは“ネクスト”の略称で、既存の航空機を次世代レベルに強化改良が改造するアラブディアの国防長官が提案したプロジェクトである。

その試作一号機を、麗慈が試験飛行を兼ねて乗っているのである。

「後は実戦で使えるか否か・・・か」

麗慈は手渡されたコーラの缶を開け、口にする。

「そうだな、十分実戦でも使えるとワシは思う。だがそう易々と戦闘が」

サンダーハートが言いかけたとき、突然基地全体に警報が鳴り響き、スクランブル発進がスピーカーを通じて戦闘機乗りたちに言い渡される。

「コーラ、冷蔵庫に入れといてくれ！」

麗慈はコーラをサンダーハートに渡すと、慌ててロッカールームに向かった。

ロッカーに入っているプラスチックの様な質感と光沢の装甲が取り付けられた専用のパイロットスーツを着てから、ヘルメットをかぶり、背部に装着された酸素吸入器とヘルメットを連結させ、格納庫に入る。

そして、腕に装着されているアーム装着型端末でNX-01に指示を出すと、装甲で覆われた直角三角形型のキャノピーが上がり、前にスライドする。

麗慈が乗り込むと、キャノピーが閉まり、計器類に明りがつく。

外にいる整備班員たちに親指を立てると、整備班員たちも親指を立てる。

NX-01には、外部だけではなく内部の情報もリアルタイムで映し出す機能が備え付けられている為、外部とのやり取りも可能なのである。

「ホルス1、離陸準備に入る」

滑走路に機体を出し、アフターバーナーの調子を確認する。

「全計器及び各部問題なし」

ホルス1、離陸を許可します。ホルス2は既に離陸して待機しています

管制室からの指示に、麗慈はスロットルを上げていき、加速する。

離陸可能速度まで達すると操縦桿を引き、機首を上げる。

一定高度に達し、ランディング・ギアを格納し、トミーと合流する。

ようブービー、遅かったじゃないか

先が上がっていたトミーが、NX-01の後方に付く。

「リーダーが隊長と呼べと言われているだろう」

何時ものやり取りを行いながら、二人は管制室からの指示を聞く。

南南西8？先で所属不明機二機を確認している。コンタクトを取り、こちらの指示に従うように呼びかける

「ウイルコ」

「了解」

命令を受け二人は南南西に機首を向け、アフターバーナーを噴かせた。

『ファースト・コンタクト』

「目標を視認したが・・・数が多い」

前進翼にスリーサーフィスの赤い機体と同じ形状だが、ヘレナモルフォの羽と同じ色の主翼に、ミヤマカラスアゲハの羽と同じ色のカナード翼と尾翼の機体が20機ほどの戦闘機に追いかけている。おいおい、ターゲット以外にF-16XAとF/A-18Iが10機ずついるぞ！

「管制室、“ゼネラルの亡霊”だ」

ゼネラルの亡霊、四年前の戦争で解体寸前まで追い詰められた“多国籍企業体ゼネラルリソース”に所属していた多くの軍人や上層部が地下に潜伏し、テロ行為を行う者達の名称である。

ゼネラルリソースは解体はされなかったものの、他の多国籍企業と比べると大幅に縮小させられた。

どうする、助けるか？

ゼネラル機に追いかけている二機を見て、トミーが聞いてくる。

「助けるぞ。管制官、聞いたとおりだ」

通信機の向こうから、溜息が聞こえた後に、クラウザー中佐は許可を出す。

ホルス隊、交戦を許可する

「ゼロ、交戦」

「チヨツパー交戦！」

武装の安全装置を解除し、敵機の群れに突っ込む。

「フォックス2」

NX-01から発射されたミサイルが、不明機を追いかけている一機のF/A-18Iに命中する。

「こちらアラブディア空軍所属の航空部隊だ。貴機らは何処の所属かを聞かせてもらいたい」

追いかけていた赤い機体のパイロットに通信を入れる。

俺たちに味方するのか？

「事と次第によるかな」

こちらに敵意は無い。このバカどもが人の話も聞かずに襲ってきやがった

声は女性だが話し方は男のため、麗慈は変声機を使っているのだろうと思った。

ブー……、……乗っている……だな

「トミー、音量を下げる。聞き取りづらい」

大音量のロックに、何を言っているのか分からず、音量を下げるように言った。

乗っているのは女だって言ったんだよ

「そうとは限らんぞ。変声機を用いているのかもしれない」

ならもう一機の方に聞いてみればいいんじゃないかねえのか？

一方的に言つと、トミーは通信を切った。

麗慈は「能天気オヤジめ」と呟いたあと、もう一機の不明機体に通信を入れる。

「こちらアラブディア空軍所属の航空部隊、ホルス隊だ。貴機らを援護するため所属を明かしてもらいたい」

助けてくれるんですか?!よかつたー

所属を言いたくないのか、人の話を聞いていないのか。

しかしあの機体は一体……?オーシアとユークはともかく、エメリアやエキストバニア、ベルカヤオーレリアのものではないだろう。ゼネラルの亡霊が作り上げた次世代戦闘機とも考えられるが……。

「よう赤い機体のパイロット、俺はトニー・ヘンドリック。チヨッパーと呼んでくれ」

俺の名はマヤ、TACネームはバイオレット

「マヤ、俺と撃墜数で競ってみねえか？」

ふっ、誰に勝負を挑んだか後悔させてやるよ

トニーとマヤの両名が、加速をして、勝手に勝負を始める。

「トニー、勝手な事は禁じられているだろう!」

麗慈は隊長として、トニーに指示を出すのが、まったく止める気配を見せなかった。

姉さん、勝手な事するとローズ隊長に

「レイナは黙ってる！それと作戦中は姉さんと呼ぶな！」

二人を止められる者はおらず、次々と撃墜していく。

「あの機体は、光学兵器を搭載しているのか？」

えっとですね、私たちの機体には最新鋭のプラズマエンジンとレーザー砲が

「待て、プラズマエンジンとレーザー砲だと？ゼネラルの亡霊はそんなものまで開発しているのか？！」

ゼネラルの亡霊？私たちは惑星セリアンスロウから外交のために来たんです

「宇宙人だと言うのか・・・！」

麗慈は驚愕するが、コックピット内に警告音が響き、ブレイクする。

「実践経験はあるな？」

え？ええ、一応・・・

気弱な声に、麗慈は不安を覚える。

「危険だと判断したらすぐに援護要請をしろ」

りよ、了解！

緊張した声に、麗慈はリラックスさせるために自己紹介をする。

「オレは風間麗慈。ホルス隊の一番機、TACネームはゼロだ」

私の名前はレイナです。TACはアゲハです

自己紹介を終えると、戦闘を再開する。

「目標、機銃の射程内」

F-16XAを射程に捕らえると、機銃で風穴を開ける。

「脱出する！」

パイロットが脱出した直後、機体が火だるまになり、空中で爆散した。

「ナイスキル、ブービー！」

トミー、後ろに付かれているぞ

「ヤベ！」

トミーは機首を上げると、ループを行い背を取る。

そして機銃を撃ち、敵機を撃墜した。

やるじゃないか

既に5機は撃墜したマヤが、トミーに通信を入れる。

トニーは4機目を撃墜し、麗慈は6機撃墜していた。

援護を要請します！

「了解した」

レイナの方に機首を向け、FCSサラマンダーのマルチロック機能をオンにする。

「ホルス1、フォックス3」

3発の長距離ミサイルが、残りの敵機を撃墜した。

「管制室、敵機はいないか？」

敵影は・・・！？高高度に影！恐らくステルス爆撃機だ！

「なに！？こつちの兵装は機銃が半分程度しか残っていない！」

こつちもだ。チャフやフレアも無い

一度帰還し、補給せよ。不明機のパイロットについては・・・

「俺たちが足止めしてやるよ。それでいいだろ？」

マヤの提案に、クラウザー中佐は暫しの沈黙後、答える。

君たちに任せる

事態が事態のため、マヤとレイナの二人に任せる判断を下した。

いいか、無理だけはするな

すぐ向かうから安心しな

麗慈とトミーは、基地の方角に機首を向け、アフターバーナーを噴かした。

「管制官、敵の爆撃機の情報を送ってくれ！」

了解した

マヤとレイナの機体に、敵爆撃機の数と飛行している高度の情報が送られてくる。

「敵は25000フィートから接近、数は6。護衛機は7機ほどいます」

それくらいなら何とかなる

待ってください！高速で目標に接近する機影を二機確認しました！

管制室から、女性の声で通信が入る。

何処の所属だ

これは・・・セト隊です！

マヤとレイナは機体を加速させ、目標地点に向かった。

「全機影は消失した」

クラウザー中佐は、レーダーに映る味方機以外が消失したことを告げた。

どういうことだ、そっちの指示ではないのか？

「恐らく彼らの判断だ。悪く思わないでくれ」

そう言うと、クラウザー中佐は通信を切った。

セト隊・・・剣十郎の部隊か

「知ってるんですか？」

黒いSU-35とJAS-39cに搭乗するチームだ

二人は、合流した麗慈とトミーにセト隊について教えてもらった。

「普段は輸送部隊の護衛を主任務にしているが、こつこつ事態には迎撃に出るんだぜ」

砂漠の黒竜・・・剣十郎に敵対する者はこつこつ呼ぶ

四年前からの知り合いである麗慈が言うと、マヤが反応する。

そんなに強いんなら一度手合わせを

「見えてきたぞ」

マヤの言葉を無視して、麗慈とトミーは着陸の準備を始める。

二機は減速を行い、着陸をする。

レイナとマヤの機体は、ランディング・ギアを降ろさずに滑走路にホバリングさせ、機体を麗慈たちの機体が入れられた隣の格納庫に

まで移動させる。

機体の底部からタイヤの付いていないランディング・ギアを降ろし、エンジンを停止させた。

『戦競 前編』

機体から降りてきたのは、二人の女性だった。

一人は薄い青色だが途中から薄い水色に変わっているロングヘアに、童顔と可愛らしい容姿をしている。

もう一人は逆で、鮮やかな赤色だが途中からダークレッドに変わっているロングヘアに、少し鋭い目つきに黒いルージュと大人といった感じの容姿をしている。

整備士たちは、こぞって二人を見に集まり、中には鼻血を出すものまでいた。

「すげえ・・・」

「なんつー大きさ」

「絶対90以上はある」

「上から90以上、55くらい、90以上と見た」

二人のダイナマイトボディを見て、整備士たちがにやけた顔をする。

「その耳と尻尾はコスプレか？」

一人の整備士が言っと、青い髪の女性、レイナが耳と尻尾を動かしてみせた。

「ほ、本物なのか？確認を・・・」

そこで鈍い音が格納庫に響き、確認しようとした整備士が倒れた。すぐ傍には、頭に直撃したであろうモンキーレンチが落ちていた。

整備士たちの視線の先には、こめかみを引きつらせるサンダーハートの姿があった。

「さっさと整備に戻れ、この大馬鹿野郎どもッ！！」

格納庫の外にまで聞こえる怒鳴り声に、トミーは驚いた。

蜘蛛の子を蹴散らすように、整備士たちが一番格納庫に走っていく。

「すげえダイナマイトボディだ」

トミーは、思わず言ってしまうが、すぐ近くに麗慈がないか確認する。

「トミーか、坊主はどうした？」

「医務室に向かった。軽い頭痛程度らしい」

サンダーハートと軽く談話をする、二人に視線を向ける。

「さつきは世話になったな」

赤い髪の女性、マヤがトミーにお礼を言った。

「気にすんな。それより、二人には中佐から話があるらしい」

トミーに案内され、二人は格納庫の隣にある司令部に向かう。

「あちいな・・・」

砂漠にあるため、昼間の温度は35 以上はある。

こんな場所で働く奴の気が知れない、とマヤが言つと、レイナが咎める。

「司令部に行けば、クーラーが聞いているから文句言つなよ」

自身も汗を掻きながら、指令所の扉を開ける。

「二人の目的については、風間少尉から聞いている。機体の方も調べさせている」

クラウザー中佐は、テーブルを挟んでレイナとマヤに話をする。

「正直言つて、君たちが地球外知的生命体と言われても信じられんよ」

耳と尻尾を除けば、その容姿は人間のそれとまったく同じだった。

そのため、医務室でレントゲン撮影と採血が行われ、今は機体の調査が行われている。

話し合いの最中にノックが入り、白衣を着た男が入ってくる。

「指令官、レントゲンの結果を持ってまいりました」

写真と一緒に、報告書を渡され、クラウザー中佐は目を通す。

「驚くべき事に耳も尻尾も本物です。尻尾には骨格があり、人間の耳がありませんでした」

「では・・・彼女たちは本物の地球外知的生命体なのか？」

そんな中、一本の内線が司令部に入る。

「機体の調査が完了したのか？」

クラウド中佐は、報告を聞き終え、受話器を戻した。

「・・・君たちが地球外知的生命体だと認めざるえないな」

「では！」

「しかし・・・君たちの目的である外交を行うには、そちらの外交官がこちらに赴かなければ出来ないのでは？」

さらに問題なのは、技術を悪用する者がいる事と受け入れられるかどうかであった。

「その事については月に停泊している母船と連絡を・・・その前にマヤがレイナの方を見ると、退室するように命じる。」

「レイナ、あなたは退室しな。さっきの礼が言いたいんだろ？」

「そ、それはそうですね・・・」

「なら行きな。司令、ゼロの部屋は？」

「兵舎の一階、奥にあるが」

マヤはレイナを押し出し、扉を閉めた。

「君は随分強引だね」

クラウド中佐は、苦笑しながらマヤを見た。

一方、廊下に出されたレイナは、案内板を見ながら兵舎に向かう。

その途中で、4人の整備士と出会う。

「レイナちゃんだっけ？どこに行くの？」

「風間少尉の部屋に・・・」

「あんな奴より俺たちと一緒にの方が面白いって」

しつこく聞いてくる内に、スリーサイズや恋人の有無すら聞き始める。

レイナの目に涙が浮かび始め、泣きそうになった時だった。

『おい』

響くような声に、整備士たちがゆっくりと振り返る。

『整備を放っておいてサボリか。その上に弱い者いじめとはな・・・いい度胸だ』

指を鳴らしながら、麗慈がにじり寄るが、レイナはそれを止めた。

「ちょ、ちょっと道を聞いただけです！涙が出たのも、目にゴミが

入っただけです！」

暫しの沈黙と睨み合いの後、麗慈は折れたのか、「行け」と短く言った。

「せ、誠心誠意、整備させていただきました！」

4人が敬礼し、格納庫に向かって走っていった。

「たく、と言いつ残し、去ろうとした麗慈をレイナが呼び止める。

「あつ、あの・・・ありがとうございます！」

いきなり頭を下げられた後に言われて、麗慈は訳が分からなかった。

『ああ、あの事が』

自動販売機のボタンを押し、アイスコーヒー入りのカップを取り出し、レイナに渡す。

レイナはそれを受け取ると、一口飲み、話し出す。

「気にするな・・・と言われても・・・」

申し訳無さそうに言うレイナに、麗慈は酸素マスクを外し、飲みかけたコーラを口にする。

「いいか、ここにいる以上、オレのルールに従ってもらおうぞ」

「分かりました。それで・・・そのルールは？」

「生きて戦闘機と一緒に帰還すること・・・それだけ」

麗慈がコーラを飲み干すと、窓の外を見る。

麗慈が「強くなりたいか？」と言うと、レイナは少しして答える。

「強くなりたいです。今のままだと、皆さんの足手まといにしかならないので・・・」

自分の事をよく知っている為か、レイナの表情は決意に満ちていた。

「いい表情だ」

滑走路に視線を移すと、尾翼に黒い犬の横顔のエンブレムが描かれた四機の機体が着陸する。

「ウオードック隊・・・オーシア空軍のトップガンチームだ」

一緒に見ているレイナに、麗慈が教えた。

「もうすぐ“戦競”だったな」

「戦競？」

「戦闘機乗りの体育祭みたいなものだ」

戦競、各国のEースたちが己の腕前を競うため、始めたのが始まりとされ、今回で100回目となる。

「出てみるか？」

「え？」

「戦競に出てみるかと聞いているんだ」

良い経験になるだろう、と麗慈は考え提案してみた。

「出ます、いえ、出させてください！」

「いい答えだ。一つ聞くが、機体の方は実弾も使えるか？」

「対鏡面装甲用のものが装備されてますけど・・・」

「よし、機体を少しいじらせてもらおうぞ」

麗慈はそう言うと、レイナを引き連れて格納庫に向かった。

『戦競 中篇』

「隊長、そんな音量で音楽を聴いていたら迷惑ですよ」

一人の青年が、ヘッドフォンを付けて前を歩く男に言うが、全く聞こえていなかった。

「無理よ、グリム少尉。うちの隊長が音量を下げることであってあまり無いでしょ？」

「・・・注意、無駄」

短めの金髪が特徴の女性が、青年に言うと、後に続くように日系の男が言った。

「真改、聞こえてんぞ。無駄はないだろう」

四人が司令室の扉の前に立つと、先頭に立っている男が扉を開けた。

「藤崎リンドウ以下三名、二週間お世話になります！」

いきなり開いた扉に、マヤとクラウザーが呆然と見つめる。

「・・・お取り込み中でしたか？」

それからすぐに、怒鳴り声が基地全体に響いた。

「切り替え完了しました」

レイナがコックピットから顔を覗かせながら言うと、麗慈がコックピット内を覗き込む。

「ふむ、操縦桿はT型ハンドルか。機体の情報はハンドルの真ん中にある画面で確認するのか」

中身はネクストに近いな。・・・もし、外交が成立すればネクストはさらに進化するのか・・・？

そうなる事が、果たして幸せなのか・・・。

「・・・麗慈さん？」

レイナに呼ばれ、麗慈はハッと我に返った。

「すまない、少し考え事をしていてな」

機体から降りると、格納庫の外に出る。

夕方になりかけているためか、西の空はオレンジ色を帯び始めていた。

昼間の暑さは落ち着き、外に出てキャッチボールをする整備士たちの姿も見受けられる。

だが、その平穩を破る音が近づいてくるのに気づき、溜息を吐く。

「よおレイジ！久しぶりだな」

「藤堂中尉・・・ですか」

露骨に嫌な顔をしているであろう麗慈の顔は、幸い(?)にも専用のヘルメットのおかげで、口の周り以外は表情が分からなかった。

麗慈は「うるさいのが増えたな」と呟きながらも、レイナを手招きで呼んだ。

「紹介しておく。この人はオーシア空軍第108戦術戦闘飛行隊ウオードック隊隊長の藤崎リンドウ中尉だ」

「藤崎リンドウだ、よろしく頼むぜ、異星からのお姫様」

リンドウの言葉に、レイナが少し赤くなる。

隣にいる麗慈は、頭痛でも覚えたのか片手で頭を抑える。

「トミーといいリンドウ中尉といい・・・なんでオレの周りにはやかましい奴が」

トミーとリンドウと言う爆音ロックコンビの面倒見役を任されている麗慈は、これ以上の面倒事が増えない様に心の中で祈った。

「今日はもう日も暮れるから、明日から訓練開始だ」

「わかりました」

「先生、ビールはおやつに」

リンドウを無視して、麗慈はロッカールームに戻っていった。

「藤崎中尉、聞きたい事があるんですけど・・・」

「ああ、俺の事はリンドウと呼んでくれ。その方が気が楽なんだわ」

「わかりました。リンドウ中尉、麗慈さんの機体とパイロットスーツは他の人とは違うのはなぜですか？」

その事か、とリンドウが言うと、話を始める。

「あいつが乗っているのは、ネクストタイプってやつだな。今まで

の戦闘機を大幅に強化改造したり、他の機体の部品を違う機体に組み込ませたりしてるんだ」

リンドウは少し間を置き、話を再開する。

「スーツも特殊なものでな、装着者の思考を読み取り、機体の兵装切り替えやラダーの操作、降着装置の上げ下げを行える代物だ」

「すごいですね」

「もっとも、コフィンシステムのパクリみたいなものだって言う奴もいるがな」

“ベルカの負の遺産”とも言われるコフィンシステム。その技術を応用したスーツを着用する麗慈が何を思っているのかは、誰も知る由は無い。

ロッカーで一人、スーツから私服に着替えた麗慈は帽垂れ付き帽子をかぶり、スポーツサングラスをかける。

夜間用のジャケットをはおり、ロッカールームを後にした。

その日の夜、食堂ではささやかではあるが歓迎会が行われる。

この時だけは上下関係はなく、皆が楽しめればそれでいいと言うものだった。

そんな賑やかな空気が苦手なのか、麗慈は誰に気付かれる事もなく食堂を出て行き、ロッカールームに来た。

そして自分のロッカーからスーツを取り出すと、ある部屋に運び込む。

そこは大型サーバーのある電算室で、スーツに内蔵されている機器系統に異常が無いか調べる事と飛行データをサーバーに入れるため飛んだ日は必ずここに来る事になっている。

スーツにプラグを繋げ、端末に電源を入れると、端末用OS“アイビス”が内蔵されている大型画面に情報が表示され、完了までの時間を表示する。

その間にやることはないため、ニュースに目を通す。

「今日の夕方、ゼネラルの電化製品の製造工場で爆発事故があり、

二人が死亡したとの会見がありました。ゼネラルはこのような卑劣な行為は許されないと遺憾の意を表明」

そこでニュースから別の番組に切り替えるが、めばしいものは見当たらない。

お笑い、ドキュメンタリー、バラエティー、旅行とチャンネルを変えろが、つまらないと感じるだけだった。

だからといって食堂に戻るのも気が進まなかった。何をされるか分かったものじゃない、と麗慈はそう考えていた。

そうこうしている内に、データの転送とコピーが完了し、スーツに取り付けられたプラグを引っ抜き、再びロッカールームに向かう。スーツをロッカーに入れると、ロッカールームを後にし、自室に戻った。

部屋にあるのは電算室にあるものと同じ端末と壁に埋め込まれた大型画面、本棚とベット。そして小さめの机とソファ、そしてコンポがある以外は何もなかった。

シンプルイズベスト、その言葉を表した部屋であった。

麗慈はコンポに電源を入れ、曲をかける。

冷蔵庫を開け、入っているミネラルウォーターを取り出し蓋を開け、飲もうとした時だった。

扉からノックの音がすると、麗慈は「誰だ？」と言い、立ち上がる。外にいる人物が、早く出て来い、と言わんばかりにノックをする。

その速度は高橋名人と同レベルではないだろうかと思わせるほどの速度のノックだった。

「だれだ？・・・レイナ？」

扉の前に立っていた人物に麗慈は驚きを隠せなかった。そこにいたのはレイナだった、はてしなく酔っ払い、片手にはビールやチュウハイの入った袋を持ち、果てしなく酔っ払った姿で。

身の危険を感じた麗慈は、すぐに扉を閉めようとしたが、手と足に阻まれた。

目つきも昼間とは異なり、酔った影響かすわっている。

麗慈は全ての状況を理解・把握し、大人しく入れる事にした。

「もぉ、ね？絶対ありえないでしょ!？」

「あ、ああ・・・そうだな」

勢い良く置かれた500ml入りの缶ビールは中身が零れそうな勢いだったが幸いにもそれは防げた。

何を間違えたのか、酔ったレイナが部屋に来て10分は経とうとしている。

その間に、レイナは三本目のチューハイに突入する。

麗慈の目の前には、ライチ味のチューハイが置かれているが、未成年者である彼が飲めるはずもなく、水滴をまとっている。

流れている音楽が演歌の為、さながら居酒屋である。

「そしたらアイツ何て言ったと思う?」そっちが動くかと思った”
つて。おめーが動かなきゃ話にならんっつーの!」

「そ、そうだな・・・」

止まるという言葉を知らないのか、レイナはチューハイをあつという間に飲み干す。

一体何が原因で、ここまで酔わせたのか。単に酒に弱いのか?と麗慈は考えるが、答えは分からなかった。

のどを潤そうと、ミネラルウォーターに手を伸ばしたが、三倍の速さでレイナの手が、麗慈の腕を掴む。

しまった、と思ったところで後の祭、レイナが睨みつけてくる。

「・・・ちよつと麗慈、私とじゃ飲めないって言うの?」

酔っている上に言葉がハッキリしている。これじゃタチの悪いただの酔っ払いだ。

それ以前に、オレは未成年だ!未成年者に、酒を飲ませる気が?

口に出したかったが、言えなかった。

さらに悪いのは、全く知らない人物の名を出す事である。

「ローズもドリーも年食ってるだけで実力が無いのよ。スリーサイズも私が勝つてるのよ!」

おいおい、ローズとドリーって人、あんたの上官じゃないのか？二人の耳に入ったら、あんた首がすっ飛ぶぞ……。

と言うか、早く自室に戻ってくれ。オレに安眠をくれ。

時計を見れば、夜中の12時近くにまで針が進んでいる。

「なあ、もついい加減に」

そこまで言いかけたところで、急に静かになる。

顔を覗き込むと、寝息を立てて眠っていた。

「人の部屋で寝るなよ」

やれやれ、と言ってからレイナをベッドに運び、布団をかける。

砂漠の夜は昼間とは違い、冷え込むためか布団をかけて寝るのが普通である。

麗慈は部屋を出て、隣の空き部屋に入り込み、一夜を明かす事にした。

「ごめんなさいッ！」

開口一番に出たのは、謝罪の言葉だった。

今にも火が吹き出そうな程、顔を真っ赤にしながら頭を下げる。

他人（しかも男）の部屋に押し入り、散々愚痴を聞かせ、拳句の果てにベッドを占領したとあっては言い訳の仕様もない。

「まあ……生きていれば色々あるんだ。お前以上にキツイ目に遭っても生きている人がいると思えば少しは楽になるだろ？」

「で、でも……」

「何時までも気にしていたら、訓練に支障をきたすぞ。リンドウ中尉にも申し訳が立たないだろ？」

昨日の出来事を引きずって立てば、まともな訓練は出来ない、と教えられた事を思い出した。

麗慈は、酸素マスクを付け、準備が完了するまで待つ。

『……一つ聞きたいが、スーツはどうするんだ』

パイロットスーツを持たないレイナとマヤに、麗慈は疑問をぶつけてみた。

「ああ、それですか。この服はパイロットスーツにもなるんですよ」
そう言うと、首につけているネックレスを操作すると、服が光に包まれる。

光が消えると、セーラー服の様なベストとミニスカートの衣装から、身体のラインにフィットしたレザースーツに変わっていた。

『これは・・・まずいだらう』

スーツ姿を見て、麗慈は目を逸らした。

体型にフィットしたスーツ姿は胸の谷間が見える上着と、ミニスカのため露になっていた太もものダブルパンチより効果が高い。

健全な少年や青年が見れば、興奮するだらう。

だが麗慈はそういった感情を、傭兵になった時に捨て去っていた。

余計な感情は死に直結する、多くの戦闘で学んだ生存術の一つだった。

『行くぞ』

麗慈は、準備が完了したNX-01に向かって歩き出した。

その後ろには、レイナの機体“アゲハ”が寄り添うように待っていた。

『戦競 後編』

「危険分子……ええ、彼は……違う？彼らもですか？」

とあるビルの一室で、男が電話でやり取りをしている。

「しかし相手は女子供ですよ。あなたは何を恐れているのか知りませんが……」

机の上には、麗慈とトミー、デルタ型の眼帯をした男と眼鏡をかけた男、そしてレイナとマヤの写真があった。

「外交の妨害の為ですか、あなた方らしい。こちらにお任せください。ええ、ちょうどいい舞台がありますので」

そう言うと、男はフックスイッチを押し、ある場所に連絡を入れる。「……私だ。“例の部隊”を明後日動かしてくれ。いいか、あくまで“事故”に見せるんだ」

戦競の行われる当日は、雲が多いながらも晴天だった。

戦技競技会、通称戦競は航空ショーも兼ねている為、今年も大勢の日が訪れていた。

「すごい人の多さですね」

「何時ものことだから気にすんな」

人の多さに驚くレイナに、トミーが笑いながら言った。

「んなことより、ハンガーに行くぞ。油売ってたなんて思われたらうるさいからなあ」

「ほう？そう思っていたのか」

トミーが振り返ると、そこには腕を組んだ麗慈が立っていた。

「少しは羽目を外させようと思ったが、いらん気遣いのようだな」
エプロンに向かって歩き出す麗慈に、トミーは慌てて弁明を始めるが、聞いてもらえそうも無かった。

一人残されたレイナは、どうしようかと考えていた。

「おい」

呼びかけられ、振り向くと一人の男が立っていた。

左目にはデルタ型の眼帯をし、服装は黒いパイロットスーツを着用していた。

「ここは民間人立ち入り禁止場所だ、すぐに」

「待ってよ、剣十郎」

後ろにいる眼鏡をかけた男が、待ったをかけた。

「あなた、レイナさんですよ？」

「え？ええ、そう・・・ですけど」

自分たちの事を知っているのは、ムバーラク基地の人たちとウォードック隊と限られているが、二人は何故かレイナの事を知っている様子だった。

「今回の戦競が終われば、教えてやるよ。生きていればの話だが」意味深な言葉を残し、剣十郎はさっさと自分の機体が置かれているエプロンに歩いていった。

「すみません。口止めされてて言えないんです。あつ、自己紹介がまだでしたね。僕はサイファー・レオハルト・ヴァンダムです。さっきの人は風嶺剣十郎、僕の所属する隊の隊長です」

向こうから「早く来い」と呼ばれ、サイファーは走っていった。

レイナは疑問に思いながらも、機体を入れている格納庫に向かう。その途中でマヤと合流し、会話をする。

「隊長たち、大丈夫かな・・・」

「大丈夫だろ？無駄に百年近く生きてるわけじゃないしな」

「姉さん、それ他人ひとに聞かれたら」

周りに人がいないのが幸いしたのが、レイナはホッと胸を撫で下ろす。

「クラウドも中佐にも言われてるでしょ？私たちのことはまだ・・・」

「分かってるって。外交を行える国を見つけたんだからいいような気もするけどなあ」

エプロンに向かって歩いていっていると、四人の男とすれ違った。

マヤは顔を少し横に向け、視線を向けた。
今の奴ら・・・何か企んでるな。

どうもきな臭い感じになってきたな・・・。

マヤは先ほどの四人から殺気にも近い雰囲気を感じ、嫌な予感を覚える。

「どうしたの？」

「いや・・・ちょっとな」

エプロンに來ると、多くの航空機が並んで、パイロットと共に出番を待っている。

しかし機体のカラーリングは本来とは異なり、それぞれ派手なカラーにしていた。

戦競と言う事で、皆が競い合うように独自のカラーリングにしているのだ。

「見るよ。あれアイマスってゲームのキャラじゃねえのか？」

「俗に言う痛機か。面妖な・・・」

「なんだ、あれは？タンクバタリアン？ゼビウス？」

「むこうにはデジタル・デビル物語女神転生と書かれた機体もありますね」

「ラサル石井のチャイルズクエスト？F/A？いや、その前に書かれている機体がF/Aなのだが・・・」

例年以上に気合が入っているな、と思っているとある機体が目に入る。

「あのF/A-18はリンドウのか？」

麗慈が見ていると、機体の持ち主であるリンドウが姿を現す。

「よう、そろって俺の機体を見学か？」

「灰色だけとは、やけに地味な色・・・ん？」

不審に思った麗慈は、反対側に回り込んだ。

「・・・おい」

右の主翼の先端だけが赤く塗られていた。

「片羽の妖精・・・だな。相棒に撃ち落されるぞ」

「う、うるせえ！お前はどうかんだ！」

「ホルス隊は敵役として決勝戦出場が決まっていますよ、中尉」
剣十郎が音も無く現れると、麗慈の前に立つ。

「この間はどうも」

「随分なあいさつだな」

まあいい、と言ってから、小声で話をする。

「あのガンテ隊には気をつける。どうも様子が妙だ」

「そうだな、さっきからこちらをチラチラと見ている」

少し離れた場所にいる、黒いジャケットを着た四人に、視線を向ける。

やはり時折こちらを見てたらしく、麗慈の視線に気付くと、顔を別のほうに向ける。

「どこの所属だ？オーシアでもユークでもなさそうだが」

「案外、ベルカ公国の回し者かも知れん。マークしておけ」

分かった、と言ったところでレイナとマヤの出番を告げる放送が流れる。

「教えたとおりにしろ。焦ったり集中しすぎたりするな」

格納庫に向かうレイナに、麗慈がアドバイスをした。

V T O L (垂直離着陸) 機である事を説明していたため、特に不審に思われること無く二機は離陸した。

競技の内容は、5秒間相手を捕捉すれば勝ちで逆に捕捉されると負けと言っていたってシンプルなものだった。

「タリホー、敵機を視認しました！」

了解！ホルス3、交戦！

「ホルス4、交戦！」

二人はホルス隊の三番機と四番機と言う事になっており、コールサインもホルス3と4と名乗ったのもそのためである。

加速を行い一気に散開すると、敵機も散開を行う。

麗慈とリンドウに教えてもらった通り、大きく緩いループを行う。

それを見た敵機が後ろに食らいつくのを確認すると、射程内に入らないように緩い旋回を多用しつつ、ジンキングを始める。

訓練中、自身も経験したロックオンできない焦りと苛立ち、そして目の前にいる敵機への一点集中。

レイナを追いかけていた敵機が、レーダーに映るマヤの機体に気付いた時は手遅れだった。

撃墜確認

敵機パイロットに、地上から通信が入る。

一方、地上では新型のF-14の調整が行われていた。

万が一に備えてのためか、一機だけで他に機体は無かった。

「なにも起こらないことを祈るしかねえか」

リンドウが機体を見ながら言った後、缶コーヒーが右の頬に当てられる。

「少しは休憩しろよ」

缶を差し出したのは、決勝戦まで待機している麗慈だった。

「おう、サンキュ」

リンドウは缶のふたを開け、コーヒーを一口飲むと状況を聞いた。

「一機撃墜したが、直後に撃墜された」

麗慈は少し笑みを浮かべていた。初めて会った時は焦りからくる一点集中や視野狭窄が酷く、到底パイロットには向いていないと考えたほどであった。

しかし、麗慈とリンドウの指導とレイナ本人の努力と向上心が、高い操縦センスを开花させた。

「嬉しそうだな？」

「そう見えたか。実際、嬉しいのかも知れないな」

コーヒーを飲み終え、自動販売機に向かう。

その途中で、落ち込みながら歩いているレイナに会った。

「よう」

落ち込んでいるレイナに、麗慈が声を掛ける。

「あ、麗慈さん」

「ちょっと付き合ってもらおうぞ」

自動販売機の所に来ると、カフェ・オレを買い、レイナに渡す。

「私・・・ダメでした。せっかく麗慈さんとリンドウさんに教えてもらったのに・・・」

落胆するレイナの頭に、麗慈はそつと手を乗せる。

「お前はよくやった。最初の頃に比べれば、大幅な成長だ」

「こ、子供じゃないんですから・・・」

麗慈が頭を撫でると、口では嫌がるが、嬉しそうな表情をしている。そこに険しい表情をした剣十郎がやってくる。

「取り込み中すまないが話がある」

動きがあつたな、と直感した麗慈は、剣十郎と共にその場を離れ、人気の無い場所に来た。

「ガンテ1と2が機体不良で先に帰還する事になったんだが・・・」

「不自然すぎるな。予備の機体なら飛行場（こ）にも用意されているにも関わらず、本部のあるエキスポシティに戻るとは」

「いずれにせよ、警戒を怠らないように気をつけるんだ」

人の気配に気付き、二人はその場を後にした。

昼休みが終わり、集計結果が表示される。

麗慈たちアラブディア空軍部隊は上位2位に入っている。

「ここまで来たのなら狙うは優勝だけだ！」

マヤが言くと、メンバーが「おお！」気合を入れるのだが、麗慈と剣十郎だけは違い、険しい表情をしていた。

何かが起こるのは明白だが、何時、どのタイミングでアクションを起こす？

狙っているのはオレか剣十郎か。それともここに居るメンバー全員か・・・。

麗慈は少し考え、ある提案を出した。

「要撃戦にはオレと剣十郎だけで出る」

いきなりの提案に、皆が驚き事情を聞きだそうとする。

「ついでに言うなら、他のメンバーは辞退しろ」

剣十郎の突然の発言に、四人から非難の声が上がる。

「ここまで来て、なに言ってるんだよ！」

「そうですね！あんまりです！」

「手柄を二人締めするつもりかよ」

「身勝手すぎるよ！」

溜息を吐きながら文句を聞いていた麗慈が、突然立ち上がり、ナイフを投げた。

「ど、どうしたんだよ、ブービー」

鋭い目つきのまま、壁に刺さったナイフを抜き、足元を見る。

そこには真新しい足跡がハッキリと残っていた。

「・・・嵐が来そうだ」

空を見ると、午前とは違い、黒い雲が覆い始めていた。

「そろそろ準備を・・・つてどうした？」

「リンドウ中尉、ウォードック隊をいつでも出撃出来る用意を」

いつもと違う麗慈を見て、リンドウは携帯で指示を出した。

「対戦相手だがガンテ隊・・・の予定だったんだが、残りの3番機と4番機もトラブルが発生したらしいから、他のチームが相手らしい」

「まるで狙ったような展開だな」

「やるべきは変わらん。行くぞ」

二人はエプロンに向かった。

「おい、何か隠し事してるんじゃないのか？」

マヤに詰め寄られるが、リンドウはさっさと逃げ出した。

機体に取り込み、各計器に異常が無いかを調べ終わると、滑走路に進入する。

空中で衝突だけは避けたい。事が起きればすぐに散開するぞ
『了解』

こちら管制塔。ホルス1、セト1、離陸を許可する

『ホルス1、了解。離陸を開始する』

『セト1了解。こちらでも離陸を開始する』

アフターバーナーを噴かせ、加速していき、離陸するとすぐに目的の空域に向かう。

二人の機体には、ハンディキャップと称してミサイルをフルに装備している。

FCSにも、発射コード封印をしており、解除しない限りミサイルは撃てない。

『新型の機嫌はどうだ？』

乗り換えたばかりだ。そう簡単に感覚はつかめん

剣十郎の搭乗する機体、su-40Y通称セクメトはsu-35やsu-37の強化発展モデルの試作型で、カナード翼を大きくし、垂直尾翼を若干外に向けている。

爆弾の搭載機能を犠牲に、ハードポイントの増加と高機能多目的ミサイルや長距離ミサイルの装備数を大幅に増やしている。

『しかし・・・いいのか？帰れたとしても、取調べが待ってるぞ』
戦友を見捨てるのに比べれば・・・

二人が話をしている内に、目的の空域に到着する。

『こちらホルス1、予定空域に到着。待機します』

了解ホルス1。1430に開始する

『ホルス1、了解』

『セト1、了解』

1430まであと5秒

マーク、と管制塔の声が二人の耳に入ると同時に、機首を第二飛行場の方に向ける。

機首を第二飛行場へ向けた時から時から情報が管制塔と第二飛行場に伝わっており、発進準備が完了している迎撃役が上がる頃であった。

『おかしい』

レーダーを見て、麗慈は疑問を抱いた。

二機の来る方角が、第二飛行場から全く違う方角だったのだ。その直後、ミサイルアラートがコックピット内に鳴り響いた。

ブレイク！ブレイク！

とっさに操縦桿を左に倒し、機体をひねらせる。

ミサイルが二機の間を過ぎたところで、近接信管が作動し、空中で爆発する。

『やるぞ！ホルス1交戦！』

『セト1交戦！』

二人が交戦のコールを言うと、撃ってきたであろう不明機に、機体を向ける。

一方、地上でも騒ぎが起こっていた。

五分前、予定通り迎撃役の二機の出撃を確認した後に現れた所属不明機に、管制塔は呼びかけるも応答は無かった。

それ以前に、飛行場全般の空域は進入禁止空域だと、各航空会社ならびに空港には連絡が入られているため、民間の航空機である可能性は極めて低かった。

各航空会社や空港に連絡を入れようとした瞬間、最悪の事態が起こってしまった。

所属不明の二機が、敵役である麗慈と剣十郎の機体に襲い掛かった。それを見てCICに居る一同は緊急国際無線で正体不明機に呼び掛けると同時に、エキスポシティにある本部へスクランブル要請を出した。

こちらガンテ1。CIC、何が起きた？状況説明を頼む

先に本部へ帰還していたガンテ隊の一番機から通信が入る。

そのとても低く、どこか不気味な感覚すら感じられる声に、メンバーは不安を覚える。

「ガンテ1、こちらCICだ。正体不明機が出現し、敵役の二機に襲い掛かった。二機は現在交戦中。援護に行けないか？」

やはりな。実は本部に匿名でタレコミがあつたため、すぐ近くにまで来ている

「了解ガンテ1。貴機らは敵役であるホルス1、セト1の援護に向かえ」

ガンテ1、了解

連絡を終えると、レーダーに映るガンテ1とガンテ2が、二機に向けて機首を向ける。

管制塔！CICでもいい！応答してくれ！

「麗慈さん！無事だったんですね！」

麗慈の声を聞いたレイナたちは、安堵する。

よく聞け！いま攻撃しているのはISAFの機体だ！

その言葉を聞き、皆が驚愕する。

詳しい事は分からないが、援軍を要請する！

「援軍ならガンテ隊の一番機と二番機が向かっていると」

その言葉に、麗慈が数十秒黙り込み、衝撃の事実を伝える。

今戦ってるのは・・・ガンテ3と4だ。ガンテ1と2は・・・オレ達を殺す為に向かってきてるんだらう

「クソッ！二対四になられたら、こちらが圧倒的に不利だ！」

リンドウたちが来るのが先か、敵が来るのが先か・・・

第三者が助ける・・・って選択肢はどう？

女性の声が二人の耳に入った直後、真上から一つの光弾がNX-01の後ろにいる敵機を撃ち抜いた。

撃ち抜かれた機体のパイロットは、脱出するまもなく機体の爆発に巻き込まれた。

「なんだ？！マヤか！？」

あら、マヤ大尉のお知り合い？あの娘もやるわねえ

隊長、残りの一機がこちらに狙いをつけてます

やっちゃって

雲の中から、先ほどの光弾がもう一機も撃ち抜いた。

「何処の所属だ？名前と所属を明かし・・・」

待て、その二人は敵じゃない

剣十郎が待ったをかけると、雲の中から二機の戦闘機が姿を現した。

『あれは・・・XR-45？もう一機はSU-47か？』

両機の形状を見て、麗慈はアイビスで見た画像を思い出していた。

聞こえるか？残りの二機は撃墜した

リンドウの言葉を聞き、二人は帰還することにした。

『獅子の子落し』

ISAFを揺るがした戦競での事件とセリアンスロウ人の母船の登場は、大陸全土に大きな衝撃をもたらした。

飛行場に帰還する途中、セリアンスロウ人の母船が現れ、メッセージを送ったのが事の始まりだった。

マスコミは戦競の事件よりも、セリアンスロウ人との接触に集中した。

ISAFの首脳陣は“誰が代表として会談するか”と話し合つが、決まらなかった。

その内の一人、ガブリエル・W・クラークソンが名乗り出て、会談を行うと申し出た。

セリアンスロウ側は、会談は母船で行おうと提案し、マスコミの乗艦も快く許可した。

「……完全に丸腰だな」

「ああ、自分たちに敵意はありませんとアピールしているんだろう。目に付く乗組員は、皆非武装の上、緊張感は伝わってこなかった。

しかし、クラークソン代表の護衛を命じられた麗慈と剣十郎は警戒しながら、前進する。

「君たち、少しはリラックスしたほうがいいよ。それでは、相手に不安を与えてしまう」

クラークソン代表に言われるが、何かが起こってからでは遅いので気は抜けないのである。

先の旧ゼネラル体制派の領空侵犯や戦競事件が起こったためか、ISAF内部には張り詰めた空気が漂っている。

後ろにいるカメラマンや記者の中にも、旧ゼネラル体制派の人間がいるのではないかと思うと、否が応にも警戒心が働く。

案内掲示板の示す方向に歩いていくと、酷く読みにくいひらがなで

“くらくらーくそんごいつこうさま”と書かれたプレートが目に入る。

「ここだな・・・（汚ねえ字だな）」

あまりにも汚い字で書かれたプレートが付けられた部屋の扉を開けると、一人の女性がいた。

「ようこそ、クラークソンさん。そして地球の皆さん。私が惑星セリアンスロウの代表、ウインディーです」

水色の髪に、レイナたちと同じく人間の容姿に水色の毛で覆われたネコの耳と尻尾を持つウインディーが、全員に挨拶をする。

「これはこれは・・・。随分と若くお美しい代表ですな」

「ありがとうございます、クラークソン代表。早速ですけど、外交の内容を説明させていただきますね」

「分かりました。その前に・・・」

クラークソン代表が、麗慈と剣十郎を手招きで呼ぶ。

「君たちはこの艦の見学でもさせてもらいなさい。他に護衛もいるからね」

カメラマンや記者の中には、変装したSPもおり、麗慈と剣十郎もその事は知っていた。

「なに、彼らには私から言っておくよ」

そう言うと、クラークソンは二人を部屋の外へと押し出した。

「彼らが・・・ホルス隊とセト隊の？」

「そうです。若いですが、大陸戦争の英雄“メビウス1”の弟子です。実力は保障します」

部屋の外に出された二人は、適当に艦内を歩いていた。

目に付くのは地球の技術では足元にも及ばないであろう技術の産物と、女性の姿だった。

「ひどく場違いの様な気がするのだが・・・」

「そ、そうだな。不思議なくらい男の姿が見受けられないが・・・」

女性たちの視線を受け、二人は“きゅうけいしつ”と書かれた部屋に入った。

そこには、薄茶色のジャケットにジーパンと、少し古めかしい格好に身を包んだ暗めの銀色で短い髪の男がいた。

「メビウス1！」

「よう！久しぶりだな」

気さくな笑顔で迎えた人物、25年前の大陸戦争でISAFを勝利に導き、戦争を終結させた伝説のエース“メビウス1”その人であった。

「何故ここに？あなたは呼ばれてないはず・・・」

「政治屋はな。俺を呼んだのは、ブルーローズって女隊長だ。用件は直接話すと」

そこで扉が開き、ブルーローズ本人が入ってくる。

「あら？クラークソン代表の護衛はいいの？」

「本人に見学して来いと言われてな」

ふうん、と短く言うと、何かを思いついた様な表情をする。

「メビウス1、依頼の方だけど彼らに任せたいの」

「随分と急だね。どうしてまた？」

「話はハンガーでOK？」

問題ないと三人は答え、ブルーローズに格納庫へと案内される。

行く途中でも、男性乗組員の姿は見え、やはり女性だけがいる。

「一つ聞くが・・・男はいないのか？」

「ケン、まさかソッチの趣味が・・・！？」

「違う。男の姿が全く見当たらないんでな」

「男性は保育士とか清掃員とかの仕事に就いてるのよ。軍とか惑星調査役は女性の仕事ね」

三人は“切ないな”と心の中で呟き、セリアンスロウの男性に哀れみを覚えた。

区画移動用転送装置に乗り、瞬く間に格納庫に到着した。

「麗慈さん！？どうしてここに・・・？」

驚くレイナに、ブルーローズが説明を始める。

「はいはい注目！急遽アグレッサー役をホルス隊とセト隊に変更、

メビウス1には指南役をやってもらおう事になったわ」

突然決められた事に、麗慈と剣十郎は当初は状況が飲み込めなかったが、すぐに理解をした。

「待て待て！オレ達は戦闘機を持ってきていない！」

「それ以前に処分がまだ決まっていけない為、乗れないがな・・・」
非常時とは言え、戦競での戦闘行為と無許可で交戦した事への処分が未だに決まらず、戦闘機に乗る事は禁じられていた。

「別にいいんじゃない？正規の軍人じゃないわけだし」

ブルーローズの何気ない発言に、麗慈と剣十郎が話し合いをする。

「どうする？」

「・・・試したい事がある」

麗慈の言葉に疑問を抱きながらも、剣十郎はアグレッサー役をやる
とブルーローズに伝えた。

攻撃許可の条件は接敵から一分後。それ以外での交戦はダメよ
地上で待機するホルス隊とセト隊の機体に、ブルーローズからのル
ール説明が行われた。

「要するに射程距離内に捕らえてから一分後に攻撃出来ます・・・
なんだろ？」

説明内容からすると、それであってます

あ、それと負けた側は勝った側の言う事を聞くこと

「なッ?!変なルールを付け足すな！」

剣十郎がツッコミを入れるが、サイファーとトミーはおかしな事に
気付いた。

いつもならいの一歩か同時にツッコミを入れる麗慈が、妙に静かだ
った。

どうしたブービー?腹でも痛いのか?

らしくないね。いつもなら真っ先にツッコミを入れる君が黙って
るなんて

「問題ない。各機、出撃するぞ」

酸素マスクを装着し、加速を行い離陸すると、他の機体も同じ様に加速し離陸する。

離陸を終え、ランディング・ギアを上げると、FCSを操作しミサイルと機銃を封印する。

『まもなく接敵範囲に入る。すれ違った直後に散開する』
了解、と三人が答え、ヴァルキュリア隊とすれ違う。

『来るぞ。散開しろ』

一気に四方に散らばり、時間が来るまで逃げに徹する作戦に出る。
「マツハで落としてやるよ！」

トミーの機体に目をつけたマヤが、背を取ろうとする。

『簡単にとれると思うなよベイバー！』

トミーは減速しながら、高度を上げるマニューバー“ハイGヨーヨー”を行い、逆に背後を取る。

やるわね。支援だけに徹しているだけのことはあるわ

『いやいや、あの二人の足手まといにならないように気をつけてるだけです』

サイファーとドロレスは互いにマニューバーを繰り返し、互いの背を取り合いながらも会話をする。

『お前はふざけすぎだ！他人の過去を聞き出そうとするだけでなく、あんなふざけたルールを追加するなど！』

いいじゃない。ケン達が勝てば好き勝手できるのよ？

ブルーローズの言葉に、通信機から大きな溜息が聞こえた。
だが剣十郎には一つ気がかりな事があった。

試したい事、麗慈の言葉が引っかかり、その意味を考えていた。

そして、その意味は最悪の形で出される事になるとは、知る由も無かった。

レイナは考え事をしていた。

この演習に勝ったら麗慈さんを誘って、二人だけで街に出かけて、夜になったら景色のいい場所で……。

もはや妄想の域に入ってしまったレイナの耳に、警告音が入る。

慌てて機体を動かすも時既に遅し、画面に“クラッシュ”の文字が表示された。

「あ、あはは・・・落とされちゃいましたね」

撃墜した相手である麗慈に、通信を入れる。

・・・レイナー等空士、荷物をまとめて実家に帰るんだ

いつも通りの慰めの言葉を期待していたが、麗慈の言葉はそんな期待を裏切る言葉だった。

「い、いやですねえ麗慈さん！冗談がキツ過ぎますよ！」

笑いながら言うレイナに、麗慈は冷酷とも言える発言をする。

お前がいれば隊の中から殉職者出る・・・早い話がお前の存在は全体の足を引つ張り全体を危機に晒す

「そ・・・そんなこと・・・」

次第に笑顔が消え、悲しげな表情になっていく。

ハッキリ言わせてもらおう。お前の存在は邪魔なだけだ

「!!!」

あまりにも冷たく鋭い刃の様な言葉に、レイナは涙を流す。

「10秒以内に決める。大人しく帰るか、この星の空で散るか」

レイナは答えられなかった。

信用していた人からの冷たく、無慈悲な言葉に深く傷つき、ただ涙を流す以外に出来なかった。

「時間だ。答えを聞こう」

レイナからの応答は無く、麗慈はFCSとIFFを操作する。

風間少尉、なにを！

「大を生かす為、小を犠牲にする」

管制室からの通信に、麗慈は冷たい口調で言うと、ミサイル発射用のボタンに指を当てる。

待て！本気で撃つつもりか！？

剣十郎からの通信に、麗慈は「無論」と答える。

テメエツ！戦競の時は一日も休まずに教えたのは何のためだったんだよ!!!

『暇潰しだ』

風間少尉、本気でレイナー等空士を攻撃するようならば・・・

『情けはかけん』

アフターバーナーを噴かせ加速し、アゲハから離れる。

NX-01を追い、ヴァルキュリア隊の三機がブースターを使い、追いかける。

ブルーローズは不審に思いながらも、機体を追いかけて続ける。

だが、NX-01の排気口に上下から四角い蓋の様なものが展開し、急減速を行った。

予想外の出来事に、三人は減速しそびれてしまった。

『フオックス3』

NX-01から放たれた長距離ミサイルが、三機に襲い掛かった。

数日後、ISAFの議員たちから隊長とテストパイロット解任を言い渡され、麗慈は行く当ても無く彷徨っていた。

ヴァルキュリア隊のメンバーは脱出し、無事だったが負傷は避けられなかった。

麗慈の左頬には青紫色のあざがあった。

謝罪しろ、マヤの言葉に麗慈は「事実を述べただけだ」と言った直後に殴られた。

「選ぶ星を間違えただけさ」

眩きは街の喧騒に消え、麗慈も人ごみに消えていった。

一方、セリアンスロウの母艦内にある一室のネームプレートが外された。

部屋の主であったレイナは、集めた絵本を紐で括り、部屋の前に置く。

「まだいたか」

「姉さん。それに隊長たちも・・・」

少しやつれたレイナを見て、皆が心配そうに見る。

あの一件が相当堪えたらしく、あの日から数日間部屋から出てこな

かったため、飲まず食わずの状態だった。

「司令官には辞表を渡しておいたから・・・」

「少し・・・寂しくなるわね」

ブルーローズとドロレスは寂しげな表情をする。

「あの野郎・・・こんど会ったらボコボコにして」

「物騒な事言うなあ」

そこにメビウス1が現れ、会話に加わる。

「なんのようだ？」

「なあに、おっさんのちょっとした小言だ」

そう言うと、メビウス1は真剣な表情でレイナの方に視線を移す。

「レイナ・・・お前は逃げるのか？」

突然の質問に、レイナは意味が分からなかった。

「あいつが言った事は酷いかもしれないが、お前はすぐに妄想や夢想に耽る癖がある」

「そ、それは・・・」

否定できなかった。戦競の時もそうだったが、先日の演習の時も空想に耽ってしまい負けた事は事実だった。

「実戦ではそういった事が自分や仲間には危険を及ぼす。あいつはそれを教える為に自ら悪役になって教えたんだ」

メビウス1の言葉に、レイナはハツとする。

私が空想や夢想到に耽れば、自分にも周りにも多大な迷惑をかける。

場合によっては大切な人を死なせてしまう・・・。

姉さん、ローズ隊長、ドリー副隊長、トミーさん、剣十郎さん、レ

オハルトさん、基地の皆さん、そして麗慈さん・・・。

私は・・・皆を守りたい・・・そのためにパイロットになったのだから・・・。

「メビウスさん、私・・・」

レイナが言いかけたとき、メビウス1の携帯が鳴った。

「おう、麗慈か。今どこに」

地獄への直行便に乗ってるようなもんだ

「おい、いったい」

「変わってください！」

メビウス1から携帯を取り上げ、レイナは麗慈と通話する。

レイナか。答えは出せたか？

「はい！答えを聞いてもらいたいから、必ず生還して」

分かってている。しかし・・・難しい話だ

向こう側からは、警告音が途切れることなく聞こえてくる。

F-16で大群はキツイな。ミサイルも機銃も底をついて・・・

さつき被弾してしまっただ

「早く、早く脱出を！」

・・・無理だ。全部試したが、当たり所が悪かったみたいで動か

ないんだ

「そんな・・・」

そろそろだな・・・ダヴェンポート中佐みたいな最期も悪く

そこで凄まじい音と共に通話が途切れた。

「そんな・・・そんなのって・・・」

その場にへたり込むレイナを見て、皆が駆け寄る。

「行くか？あいつの弔い合戦に」

差し伸べられた手を掴み、レイナは立ち上がった。

「行きます！」

旧ゼネラル体制派の戦闘機部隊が、いまだに飛行していた。

こちらメビウス1。各機、準備はいいか？

「メルツェル、準備OK」

「アウル、こちらOK」

「バイオレット、いつでもいけるぜ」

「アゲハ、交戦準備完了」

各機、散開し各個撃破しろ

F/A-22ラプターが敵機に中距離ミサイルを撃ち、四機を撃墜する。

助かったのよ」

「つまり・・・偶然が重なって生き延びたって事？」

「その通り」

ゲームを放り出し、麗慈はレイナを見る。

「少しやつれたな。ちゃんと食事してたのか？」

「誰のせいだと思ってるんですか?!」

レイナの顔を見て、麗慈は笑みを浮かべた。

しかし直ぐに表情を引き締め、真剣な表情になる。

「答えは後で聞くとして・・・もう一つ聞きたいことがある」

それはセリアンスロウ人への質問だった。

「この地球の歴史は調べたんだろう？それでも交友を結びたいと言
うのか？」

その質問に答えたのはレイナだった。

「私たちは交友を結びに来たんです。過去の事も・・・未来の事も
含めて・・・」

レイナの瞳に迷いは無く、麗慈は笑みを浮かべる。

「メビウス1、クラークソン代表に連絡を頼む」

「その必要はない」

声の主であるクラークソンが、ウィンディー代表と一緒に姿を現し
た。

「申し訳ありません。外交は既に成立していたんです」

「すまないね、なかなか連絡を取る暇が無くて」

麗慈は「予想はしていた」といい、ある話を切り出す。

「オレは、"BLUE SKY"に戻ろうと思う」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4183p/>

ACE COMBAT 天空の戦神

2010年12月18日23時51分発行